〈討論会〉『Realism for Social Sciences — 経済学におけるリアリティと社会の科学のための新しいリアリズム』

組織者（＊代表司会）： 葛城政明（大阪大学）・長久領壱（関西大学）・鈴木 岳（明治学院大学）・竹内惠行（大阪大学）・村上裕美（関西学院大学）・＊浦井 憲（大阪大学）

開催形式： セッション時間枠全体を用いた討論会

概要： 本企画は、上記組織者を一部のメンバーとして立ち上げられた学際的な分野横断領域研究 Realism for Social Sciences の一環であり、テーマ「経済学におけるリアリティと社会科学のためのリアリズム」に基づいて、文学、哲学、社会学、法学、医療経済学、人類学、経営学等、分野をまたいだ研究者によって行われる、「これからの経済学」のための討論会である。

登壇予定者： 上記の組織者全員・福井康太（大阪大学：法社会学）・小林大介（神戸大学：医療経済学）・森井大一（大阪大学：医学）・守永直幹（宇都宮大学：仏文学）・村田康常（名古屋柳城女子大学：哲学）・塩谷 賢（早稲田大学：哲学）・更に若干名の追加可能性あり。

趣旨：今日、経済学研究者は「自らの問題意識やパラダイムを根本的に疑って考えるという姿勢が希薄である」と指摘されると、頷かざるを得ないのではないでしょうか。しかしながら、経済学において我々が、「リアル」に用いている様々なオブジェクト、例えばそれが「効用」であるにせよ「企業」であるにせよ、あるいは「貨幣」にしても「信用（創造）」にしても、それらは理論上の枠組みとして作られたものであると誰もが多かれ少なかれ感じており、その中でなお経済学における「リアリティ」というのは「記述されるもの」であり、決して「作られたリアリティ」などとは呼ばないであろうと考えられます。あるいは、そうした経済学に於ける記述が「Truth」を（少なくとも）目指していると考えていると思われます。では、そのような「経済学における Truth」とは何なのでしょうか。

経済学に於ける「リアリティ」を出発点として、さらに「社会の科学」という上位の概念に向けて、上記のような問題提起とともに、「**真の（新しい）リアリズム**」ということをその目指すところのキーワードとして、学際的に考えていきたいというのが、この討論会の趣旨です。

近年、経済学のテーマ範疇と大きく重なりを持って、社会科学全体におけるリアリズムへの関心が高まっています。およそその理由として (1) 近代科学の依拠する「経験」の実質的位置付けが変容してきたこと、(2) 方法論的個人主義と認識論の行き詰まり、(3) グローバル化が進行する中、そこに解消されない個別特殊のリアリティが表面化しつつある、といったことが挙げられるでしょう。経済学ならびにそれと関連の深い社会科学分野においては、そういったリアリズムへの具体的な回帰の論点が期待されます。哲学の分野からは「理論」の「実践」という「リアリティ」にまつわる「真のリアリズム」、いわゆる「新しいリアリズム」も含めて真の「科学論のリアリズム」、新しい「科学（学問）の方法」といった視点からの議論が期待できるでしょう。そして文学および経営学からは「想像力」とそれらを通じた「綜合的」な「学問という営み」といった方向から、社会科学諸分野そして経済学に向けての有機的なフィードバックの論点が、期待できます。加えて喫緊のテーマに関わるところとして、上述した「実践」ということの「リアリティ」という問題は、今日のコロナ禍における科学側からの政策提言といったことにも深く直結する事柄であり、これからの「科学（学問）」と「社会」のあり方ということについて、重要な思考の出発点となることが期待できるでしょう。

※ 予定登壇者の増減その他内容に変更のある場合、以下 URL の BBS にて情報配信します。

http://urai2.econ.osaka-u.ac.jp/bbstama/joyful.cgi?read=463&bbs=1&pg=0